

女流義太夫知っていますか

かつて、女性アイドルなみに人気を誇った伝統芸能があった。「女流義太夫」である。女性が義太夫節の語りや三味線を動める芸能で、明治時代には「ファンクラブ」ができるほどの隆盛を見たが、次第に演奏者が減少、義太夫節の本拠地である大阪では近年、公演もできないほどになつていった。だが、ここ数年、定期公演やワークショップが積極的に行われ、ファンの裾野が広がりにつある。女性が奏でる義太夫節には、男性とはまた違った魅力がある。上方文化の活性化のためにも、女流義太夫の再興が期待される。

定期公演復活、今年も

「一年奇つたこの母が、一人残つてこれがまゝ、なんと生きていらりよござ(中略)」と取りついで泣き出す……

昨春、大阪市中央区の国立文楽劇場小ホールで開催された女流義太夫「瑠璃の会」の公演。「仮名手本忠臣蔵・早野勘平腹切の段」で竹本土佐恵さんの語りと鶴澤駒清さんの太榊三味線が、若くして命を散らした勘平の義理の老母の悲しみを切々と語り尽くすと、場内を埋めた観客から大きな拍手が起こった。

同会が発足したのは平成28年。大阪で女流義太夫の演奏者が極端に減少、定期公演ができない現状を憂えた東京在住の太夫、土佐恵さんが尽力。関西の演奏者に呼びかけ、賛同した4人で結成された。毎年、大阪市内で公演を開催、観客も増えつつある。「前のめりになって聞いてく

上方落語、講談に続け

だまのがうれい」と、同会の理事を務める駒清さんは喜ぶ。現在、メンバーは8人となり、今年も3月15日、国立文楽劇場小ホールで公演が開かれる。

女流義太夫の公演は10年ほど前まで、毎年このように行われていた。だが、22年に文楽の芸芸員と女流義太夫らの団体「人形浄瑠璃因協会」が財政的な理由から解散、同協会が女流義太夫の公演を主催していたため、関西の女流義太夫は定期公演を行つことができなくなった。

三味線の豊澤駒清さんは女性ならではの難しさも指摘する。「女性の場合は結婚、出産で修業を中断して、そのまま復帰されないケースもありません」

「J-Union」連「も登場

女流義太夫とも呼ばれる女流義太夫の人気が最盛期に達したのは明治中期、美濃と美方を兼ね備えた豊澤昌呂昇ら人気スターが登場、追っかけの男学生が、クライマックスになる



亀岡 典子 <かめおかのりこ>



昨年の「瑠璃の会」で「本蔵下屋敷の段」を動める竹本住蝶(すみちよう)さん(左)と豊澤住輔(すみすけ)さん
＝大阪市中央区の国立文楽劇場小ホール(「瑠璃の会」提供)

20年以上にわたって、能楽、文楽、歌舞伎など伝統芸能を担当。文楽のアルジュリア公演、歌舞伎のバリ・オペラ座公演などの同行取材も。大阪本社文化部特別記者。

今週のテーマは：

本場・関西立ち上がるとき

昨夏、大阪で、東京の女流義太夫の人間国宝、竹本駒之助さんの義太夫節を間近で聞く機会があった。衝撃を受けた。語つたのは、古代日本を舞台に、己の妾という歴史の渦に巻き込まれた娘、お三輪の悲劇的な運命を描く大曲「妹背山姥女庭訓・金殿の段」。

約1時間、駒之助さんは語り切った。嫉妬が極限に達し、「疑智の相」という表情になるお三輪の苦悩、悲しみを全身全霊で描き上げたのだ。当時、83歳。病気で目を患い、高齢で万全の体調でないに

もかわらず、誰もがその芸に心を奪われた。今曲は文楽でも上演される。だが、駒之助さんの語りには、男性の太夫とはまた異なる迫力があった。ヒロイン同性であるからこそ、魂が空ろ添ったのかも知れない。

そんな女流義太夫の芸が関西から姿を消しつつあったのは切なかつた。関西は義太夫節の本拠地である、という自負があったからだ。だが、関西の女流義太夫たちはしなやかに立ち上がりつつある。今が踏ん張りどころだ。

と「しする」と「する」と声をかけたことからどうする連と呼ばれた。今でいうアイドルと追っかけのファンのような関係である。だが、大正12年の関東大震災をきっかけに低迷、娯楽の多様化や人形のない浄瑠璃の公演がヒュナル時代にそぐわないなど複合的な理由があった。

女流義太夫には、男性の義太夫節にはない独特の情感や繊細な表現がある。生き別れになった幼いわが子と再会する乳母、重の井の思いを描いた「恋女房染分手綱」、忠義のためになが子を犠牲にせざるを得なかった乳母、政岡の心情を描く「伽羅先代萩」……

東京集中のひずみ

関西の伝統芸能界は戦後、さまざまにチャンネルで衰退と再興を繰り返してきた。上方落語は落語家が十数人という状態に陥り、講談は1人の時代もあった。娯楽の多様化とともに、政治経済の東京一極集中がもたらした結果といえる。動物は絶滅すると二度とこの世に存在できないように、芸能文化も一度なくなってしまうと復活するとは困難だ。そういう意味では、関西の女流義太夫は絶滅の危機にひんしていたのかも知れない。

その魅力が再認識されれば、上方落語や講談のように、再び息を吹き返す、大勢の人に親しまれる道が開かれるのではないだろうか。そこそが文化の多様性につながる。